

# 錦聖遺跡発掘調査報告書

## —富田林市錦聖町所在—

1983

錦聖遺跡発掘調査団  
富田林市教育委員会

富田林市埋蔵文化財調査報告書 九

錦聖遺跡発掘調査報告書

—富田林市錦聖町所在—

錦聖遺跡発掘調査団

昭和五十八年三月

富田林市教育委員会

# 本 文 目 次

は し が き

例 言

## 第1章 調 査 経 過

- |                   |   |
|-------------------|---|
| 1. 調査にいたる経過 ..... | 1 |
| 2. 調査組織および経過..... | 1 |
| 3. 日誌抄 .....      | 2 |

## 第2章 遺 構

- |               |    |
|---------------|----|
| 1. はじめに ..... | 4  |
| 2. 層 位 .....  | 4  |
| 3. 遺構各説 ..... | 5  |
| 4. 小 結 .....  | 10 |

## 第3章 遺 物

- |               |    |
|---------------|----|
| 1. はじめに ..... | 11 |
| 2. 遺物各説 ..... | 11 |
| 3. 小 結 .....  | 13 |

付 錦聖遺跡出土土器の胎土分析..... 14

あ と が き..... 16

## 図 版 目 次

- 図版第1 位 置 図 調査地と周辺遺跡  
図版第2 位 置 図 調査対象地  
図版第3 遺構実測図 遺構全図  
図版第4 遺物実測図 上師器、土釜  
図版第5 遺物実測図 塚、瓦器、上師器、瓦質  
上器  
図版第6 遺構写真 遺構全景  
図版第7 遺構写真 表土除去前、表土除去後  
図版第8 遺構写真 遺構検査状況  
図版第9 遺物写真 遺物検出状況  
図版第10 遺構写真  
図版第11 遺物写真 土師器、土釜、瓦器、瓦  
質土器  
図版第12 遺物写真 塚、磁器
- 図1 調査風景  
図2 S B 01, S B 02, S B 03, 建物実測図  
図3 S B 03 建物実測図  
図4 S B 05 建物実測図  
図5 S K 12 土甌、セクション実測図  
図6 羽釜実測図  
図7 錦空遺跡、嶽山遺跡、龍泉寺出土  
上器、瓦のR<sub>b</sub>-S<sub>f</sub>分布図

## 表 目 次

- 表1 遺物の出土地点と量  
表2 錦空遺跡出土土器の分析結果

## は し が き

本市には石川が流れる、いわゆる石川谷を中心として、数多くの遺跡が散在しております。

これらの遺跡は、わたしたちの祖先が遺した歴史的遺産であり、これまでにも、たびたびの発掘調査が行われ、そのつど、貴重な歴史資料を得るにいたっております。

今回の錦聖遺跡発掘調査もそのひとつで、この調査は遺跡内を通過する市道の新設に先だって「錦聖遺跡発掘調査団」に委託したものであります。

東西350メートル、南北900メートルの広がりをもつと予想されるこの遺跡附近では、従来から弥生式の土器片や、石器あるいは須恵器といった遺物が採取されており、大小いくつかの発掘調査も実施され、その性格もしだいに解明されつつあります。

このたびの発掘調査におきましても、以下に詳しく述べておりますように、多くの成果をあげることができ、これをここに報告できることは、わたくしといいたしましても非常にうれしく思うところであります。

おわりになりましたが、調査団を組織していただいた関係者に対し、深く感謝いたしますとともに、今後におきましても本市文化財行政について、一層のご助力を賜りますようお願い申し上げます。

昭和58年5月

富田林市教育委員会

教育長 福田治平

## 例　　言

1. 本書は、富田林市の委託によって錦聖遺跡発掘調査団（団長・中村浩）が担当実施した錦織公園道路建設に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査は、昭和58年2月14日から23日まで現地調査を実施し、その後大谷女子大学資料館において遺物整理を行った。
3. 調査の組織および経過については、後述する本文を参照されたいと思うが、地元富田林市教育委員会をはじめ大阪府教育委員会、大谷学園には、調査の実施に当って種々ご協力、配慮をえた。ここに記して謝意を表する。
4. 本書の執筆編集は、主として中村が行い、1—1…中辻亘、付…三辻利一氏の分担執筆をえた。なお本書作成の全般にわたって大谷女子大学考古学研究会諸姉の協力をえた。

## 第1章 調査経過

### 1. 調査にいたる経過

錦聖遺跡は、富田林市教育委員会が昭和46年から51年にかけて実施した分布調査の結果、弥生土器、石器、須恵器、土師器等の遺物の散布が認められ、その存在が周知されるようになった。

同遺跡周辺は、西方に羽曳野丘陵をひかえ、東方に金剛・葛城山脈が一望できるのどかな田園地帯である。

こうした好環境にあって、遺跡西方の羽曳野丘陵には、府民の憩いの場として錦織公園が計画されており、この関連事業として、富田林市が公園道路新設工事を実施することとなった。これを受け、昭和58年1月10日に富田林市教育委員会が試掘調査を実施した。その結果、ピット等の遺構が検出された。このため、本調査が必要との判断に基づき、工事を担当する市建設部土木課と協議に入り、結果として、大谷女子大学講師 中村浩を代表とする「錦聖遺跡発掘調査団」を組織し、本調査を実施する運びとなった。

本調査は、大谷女子大学考古学研究会会員の協力を受けて、昭和58年2月14日から開始するに至った。

### 2. 調査組織および経過

錦聖地域内の道路建設に伴う埋蔵文化財の調査について、既述のごとき経過によって「錦織遺跡発掘調査団」に委託された。これにより昭和58年2月14日から2月末日までの予定で発掘調査を実施することとなった。

調査にあたっての調査組織の編成は以下に示した如くである。

調査主体 錦聖遺跡発掘調査団

調査顧問 北野耕平（市文化財調査会考古学担当委員、神戸商船大学教授）

調査団長 中村 浩（大谷女子大学講師）

調査員および補助員

青木昭和（花園大学）、森島由貴、藤野辰美、小西益子、細谷知代

菅原環、山本由紀美、中野有実子、土佐美弥子、四宮加容子(大谷女子大考古学研究会)

調査事務担当 富田林市教育委員会社会教育課

調査協力 大谷学園、大阪府教育委員会、(株)大伸建設  
その他、地元の方々の好意ある協力をえた。

調査の対象となった部分は、かつて水田であったところであり、調査直前には富田林市教育委員会によって行われた試掘用トレンチが、殆んど埋められた状態で、かつ工事用入路として一部用いられていたという状況であった。

調査は表土、耕土部分の除去作業を建設機械によって行い、その除去後を人力によって掘削清掃するという方法をとった。なお、建設機械によって排出された排土については人力によって破碎し、内部に遺物が含まれるかどうかについての検討も実施した。この表土耕土除去と平行して対象地域周辺の平板測量を実施した。全体の表土除去完了後写真撮影を行い、遺構検出作業を行った。遺構の輪郭を出し、チャーチによるマーキングを行い、さらに写真撮影を行って、その後、遺構内部の検出作業を実施した。遺構検出完了後、遺構実測を1/20、及び、土層観察の為、東西南北、各側壁面の実測(1/20)も実施した。調査の結果得られた成果については後述するので、ここでは省略する。また、調査の日時を追った経過については次項の日誌抄に記述しているので、あわせて参照されたい。

### 3 日 誌 抄

- 2月14日 調査開始。荒掘開始(表土除去) 平板測量。地区割を行う。
- 15日 全体の表土除去完了、清掃作業。写真撮影。
- 16日 遺構検出作業。写真撮影。各遺構からは土師器、須恵器(少數)、瓦器など出土。中央部の長方形の掘り込み(SK13)からは、植物の葉を検出。夏原信義氏來訪。
- 17日 ピット検出作業。土師器、須恵器、瓦器など出土。SK13から土師質皿の完形品が1点・植物の葉・木片などを検出、断面の実測。



図1 調査風景

- 18日 降雪のため、作業中断。
- 19日 昨日からの降雪のため、作業中断。
- 20日 ピット検出作業完了。清掃作業。写真撮影。調査団顧問、北野耕平氏（神戸商船大学教授）来訪。
- 21日 全体の割り付け作業。
- 22日 実測・レベル作業・東、西、南側の断面の実測作業。
- 23日 北側の断面の実測作業。全体の清掃作業。写真撮影完了。現地調査完了。三辻利一氏（奈良教育大学教授）来訪。土器の胎土分析を依頼。以後、大谷女子大学資料館において遺物整理。

## 第2章 遺構

### 1. はじめに

今回、調査の対象となした幅6～7m、長さ61mの範囲内では、自然流水路と考えられる部分3ヶ所、及び掘立柱の建物跡5ヶ所、土塹5ヶ所の他、不明ピット群などが検出されている。とりわけ建物が検出された部分は調査区の中央域にあたり、いずれも交錯する状態で検出されており、少なくとも2,ないし3時期の期間、建物が存在したことを物語っている。遺構の遺存状態は、いずれも田畠の開墾に伴い大半が削平された状態であり、旧状は今回検出した以上の遺構が存在したことは明らかである。なお、遺構は調査区の東西に拡がっており、とりわけ東部への拡がりは著しい。

以下、調査によって得られた知見のうち各層位各遺構について記述することとする。

### 2. 層位

堆積状況を観察するため、トレント東壁、および西壁、さらに南、北の4面を実測観察の対象とした。いずれの面も耕作面がかなり下層にまで及んでおり、良好な堆積状況を把握するものとしては好資料となりえないものである。

#### 西壁セクション

トレントの西端は、ちょうど田畠の境目にあたっており、上部の水田面からは約80cm以上の比高差をもつ。セクションの観察は、当該断面のうち、本調査に関わる部分の観察のみにとどめた。表土層は20～30cm前後の堆積が南部から北部にかけてみられ、その直下に南端では青褐色砂質土、中央部以北では茶褐色砂質土が第2層としてみられ、これらの層に喰い込む形で断面にうちこまれた木杭の痕跡がみられた。また、これらの層から下層に、遺構面で検出したピットの断面を認めることができる。なお、明瞭な床上面は確認されなかった。地山層は黄褐色粘質土である。なお、層の重なりは最大の4層であり、地山は北部域では砂質を多く含む状況が看取された。

### 東壁セクション

東壁セクションは、調査によって検出された遺構群の中央を貫く形となっている。表土層および耕土層、2次堆土層さらに、焼土、遺物を含む茶褐色粘質土からなる包含層が地山直上にみられる。南から北まで大きな層位的な変化ではなく、順調な自然堆積によって構成されたものと考えられる。

### 南壁セクション

南壁セクションは、耕土層、青灰色粘土層、褐青色粘土層の3層からなり、西から東へわずかに地山の傾斜が下っていることがわかる。なお、当該部分からは遺構が検出されておらず、観察面での状況からみる限り、第1層の耕土層のみが堆積層であることがわかる。

### 北壁セクション

黒灰色粘質土（耕土）、さらに褐灰色粘質土層、茶褐色砂質土層の2～3層から構成される。東部に西から東にかけて傾斜面を有するが、東部の第2層、褐灰色粘質土層は遺物を含む。また、西端部の茶褐色砂質土はSD07溝の底部に堆積した褐鉄鉱を含む層である。

## 3. 遺構各説

### 建物跡

#### S B 01

主軸方面をほぼ南北にする掘立柱建物で、南北の柱間4間、東西の柱間2間以上からなる。南北8.2m、柱間の距離は2.5mでピットの径は28～40cm、深さは10cmを各々はかる。また東西3.3～0.4m柱間は2.5mでピットの径10cm、深さ10cmを各々はかる。遺物はピット中から瓦器、土師器が採集されている。

#### S B 02

南北ないし東西にのびる建物で、南北の柱間4間、東西の柱間2間以上の束柱を有する掘立柱建物である。南北8.2m、柱間の距離は2.5m、東西0.7～3.5m、柱間は1.75m、ピットの径25～40cm、深さは10～17cmを各々はかる。S B 01建物跡とはほぼ平行しており、同時存在はありえないものである。またS B 04建物とも

複合関係にあり、当該遺構とは併存しない。遺物はピット中から瓦器、土師器が採集されている。

#### S B 03

長軸をほぼ南北に向け、南北3間以上、東西2間以上の掘立柱建物である。検出部分は西北隅部分を含む一部分の確認であり、他の遺構と同様、全体規模は不明である。南北4.8m以上、柱間の距離は1.2~1.8m、東西の柱間の距離は1.1~1.7m、ピットの径25~45cm、深さは12cmを各々はかる。遺物はピット中から瓦器、土師器が採集されている。

なお、本建物跡の南域でS B 01建物、S B 02建物と各々重なっている。

#### S B 04

ほぼ南北ないし東西に主軸を持つ建物で、S B 04 建物と南端部で平行関係を有する。南北2間、東西2間以上の掘立柱建物であるが、ピットの径が極めて小さく、遺存度も極めて不良であることから、遺構が最も上

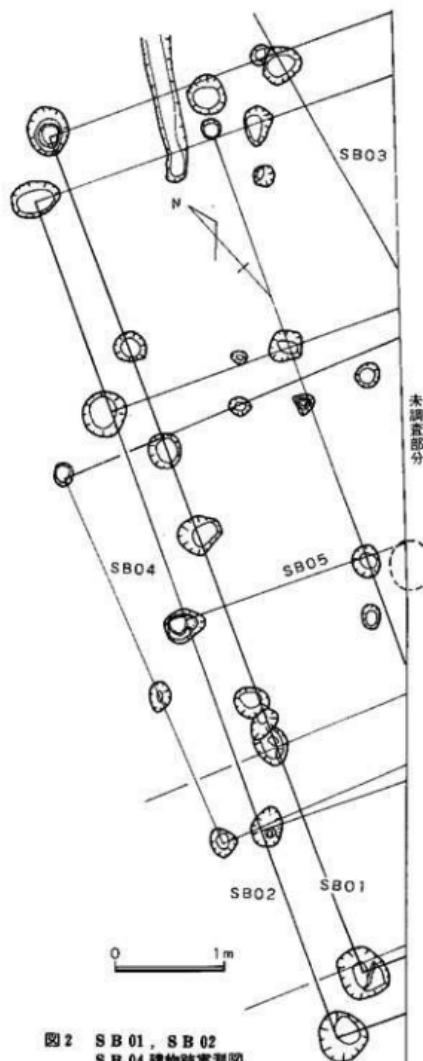


図2 S B 01, S B 02  
S B 04 建物跡実測図

層部に設置されたものと考えられる。西北3.65m、柱間の距離は1.5m～2.2m、東西の柱間の距離は1.7m、ピットの径は20～30cm、深さ5～9cmをはかる。SB04建物は、SB01、SB02建物の南部、SB05建物の北部と重なっている。遺物は確認されていない。おそらく上層部分にあったため削平されたものと考えられる。

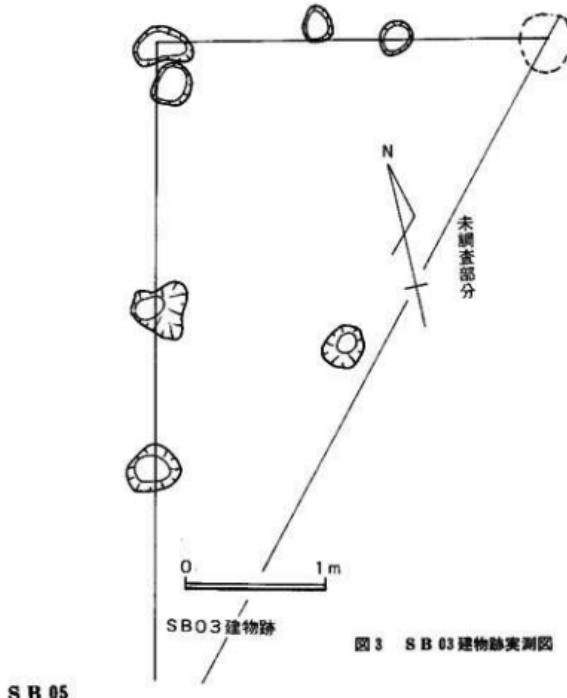


図3 SB03建物跡実測図

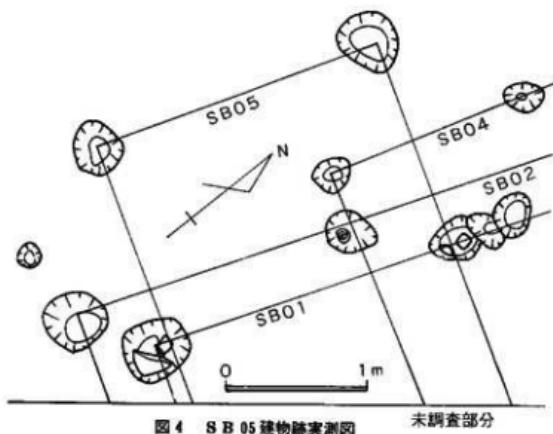
東西に長い1×2間以上の建物である。南北の柱間の距離は2.1m、ピットの径30～40cm、深さ15～20cmをはかる。なお、本建物跡はSB04の南部と重なりさらにSB02、SB01の遺構とも重複する。

#### 溝 跡

#### SD06

調査区の北部域で確認された東西に蛇行する流水路の底部の痕跡である。肩部等は全て開墾により削平されており、その旧形を想定するのは困難であるが、わずかに流水路であったことは褐鉄鉱の遺存によって判断しうる。

また、西から東への流水であったことは比高差のわずかな差から想定可能である。最大幅は東端での約3m、最小幅は中央部付近の約80cmである。



#### S D 07

調査区の北端で検出されたS字状に蛇行する流水路の痕跡である。状況は、SD 06と同様であり最大幅は西端部の断面にみえる3.5m以上、最小幅は東端部断面にみえる1mである。SD 06、SD 07ともに上部を削平されているため、その詳細については明らかにしないが、その蛇行の状況等からみて自然流水路の可能性が濃いものと考えられる。

#### S D 08

SB 03の西から、SB 01、SB 02を通過する形で、南北に掘られた幅15cm、長さ3.1m、深さ11cm前後を各々はかる素掘りの溝である。用途は不明。遺物は内部から瓦器および土師器が採集されている。人為的に設定されたものであろうが、その用途は不明。

### S D 09

S D 08 の南へ続く幅60cm, 長さ 3.5m 以上の自然流水路と考えられる溝の痕跡である。状況は、S D 06, S.D 07 と同じく溝の肩は全く認められず、全て削平されたものと考えられる。なお、流水方向は西から東である。

### S D 10

調査区の南部域の東側壁面にそった形で検出された溝で、最大残存幅は 1.3m, 長さ 8m をはかる。なお、南部に SK 11土塹、SK 12土塹を伴っており、溝でなく上塙の可能性もある。遺物には、瓦器、土師器がある。

### 土 塹

#### SK 11

SD 10の南部域に所在するもので、南北 1.6m, 東西40cm, 深さ 3cm をはかる不整形な上塙である。内部から土師器が出土している。

#### SK 12

南北 2m, 東西90cm, 深さ 10cm 以上の不整形な土塹で、東半分は調査対象からは離れている。

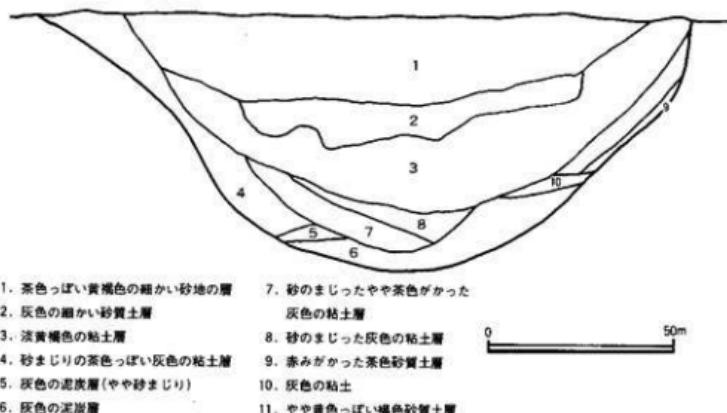


図 5 SK 12土塹セクション実測図

#### S K 13

調査区のほぼ中央に位置する南北2.6m、東西1.9m、深さ68cm前後をはかる楕円形の土塙である。遺物には、内部から土師器が採集されている。

#### S K 14

S K 13土塙の東に接して位置する南北1.5m、東西0.85m、深さ15cmをはかる土塙である。西をS K 13土塙によって削られており、当該土塙より先行する。

#### S K 15

調査区の南端近くに位置する不整形な土塙で、内部には土師器小皿が充満していた。用途および他との関連は不明。

#### S K 16

S D 10溝の西に位置する。径25cmのピットである。用途は不明。

### 4 小 結

以上今回の調査で検出した遺構、および層位について記述してきた。しかし、調査の範囲が狭小なこともあります、建物跡の規模等については東部への拡大が可能となった時点で明らかとなる。また、田畠による開墾のため上部の大半が削平されており、今回検出された各遺構の上面に位置したと思われる遺構についての知見を得ることができなかった。これについては、西部域の調査によって補完されるものと考えられ、今後に期する点が多いのは否定できない。さらにS B 02建物については東柱をもつことから構造的には、倉庫跡と考えられることも注目に値しよう。ともあれ、中世期の掘立遺構の検出によって、当該遺跡の性格の一端をつかみえたことは、今回の調査の成果としてあげられるだろう。

## 第3章 遺物

### 1. はじめに

調査によって得られた遺物には、土師器、須恵器、瓦器、磁器、石器、瓦質土器、瓦などの種類があり、量的には土師器が最も多く、390片を数え、次いで瓦器の175片、須恵器の9片と続いている。総点数は、590点あまりとなる。各出土地点別の遺物については、表1に示すので参照されたい。

	瓦器	土師器	須恵器	磁器	須恵質土器	その他
SB01	21	49	7	0	1	石1
SB02	7	5	0	0	0	0
SB03	5	4	0	0	0	炭少々
SB05	5	18	0	0	0	0
SD08	6	10	0	0	1	0
SD10	2	10	0	0	0	0
SK11	0	23	0	0	0	瓦質1
SK12	4	11	0	1	0	瓦1、炭1
SK13	8	7	2	0	0	壇1、炭1
SK14	0	2	0	0	0	瓦質1
その他	117	251 <small>(羽釜片を含む)</small>	1	4	6	瓦質3、不明3
計	175	390	10	5	2	19

表1 遺物の出土地点と量

### 2. 遺物各説

#### 土師器(図版4-1~26, 8-2)

径7.0cm~8.5cm、器高0.9cm~1.2cmをはかる。いずれも小皿である。焼成は、あまく、軟質で胎土は比較的密なものが多い。大半が細片化しており、復元しうるものは極めて少なく、図化したものも出土量のごく一部である。

#### 羽釜(図版4-28, )

径22cm、器高4.0cm~6.5cmを復元できる羽釜形の土器2点がある。いずれも細片化しており、旧形全体を想定するのは困難である。突端下方の底部には黒色のス

スの痕跡を有する。従って、これらの土釜は実用に供されたものと考えられる。

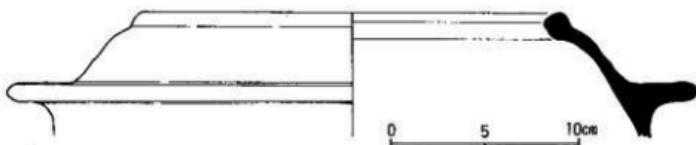


図6 羽蓋実測図

#### 瓦質土器（図版5—7.8）

脚状の破片である。旧状は鉢状のものに三方の脚を伴う形をなしていたものと思われる。二点出土しているが、いずれも別個体のものと考えられる。1つは径2.6cm、残存長7.2cmで、他の1つは、径2.5cm、残存長6.6cm（8）をはかる。その他には、器形を全く想定しえない細片が多くみられる。

#### 瓦 器（図版5—3～6）

瓦器は、全体を想定しえるものは、SK13土塙から出土したもの（3～5）の他、総数で3点で、その他で2点程度である。その他は、いずれも整地層部分からのもので、細片化しており、図化不可能である。瓦器の口径は、11cm前後で、器高は、2.8cm前後をそれぞれはかる。器形は皿状のもので、高台は伴わない。内面には圓文状の暗文、外面には一部、暗文の痕を認めるものの、大半は指押さえによって調整されている。焼成は良好堅緻、胎土は密である。

#### 壺

6.5×5.5cmをはかる須恵質の壺の破片である。上下面ともに径4cm前後をはかる五重の同心円文叩きを施している。側面は、一面のみの遺存であるが、ヘラ切りによって、ほぼ水平に仕上げられている。断面の観察によって幅6cm、厚さ1cm～3cm、長さ4cm前後の粘土塊から本遺物が形作られていることがわかる。胎土には、黒色粒を多く含み、全体として粗である。なお、焼成は良好堅緻であるが、一方の面が、やや焼成があまくなってしまい、色調が白っぽくみえる。

#### 磁 器

4.4×2.4cmをはかる青磁の細片である。SK13土塙から瓦器、土師質土器等と

ともに出土。内面には、花文を陰刻しており、形態は、皿ないし椀と考えられる。釉薬の色調および胎土の状況からみて、中国からの輸入品である可能性が濃い。

その他、近現代のものと考えられる染付が、4点、北端部の表上層から出土しているが、直接、当該遺構面とのつながりはない。

### 3. 小 結

以上、今回の調査によって出土した遺物について記述してきたが、これらの遺物のうち、とくに注目すべきものとしては、壺、青磁があげられよう。前者は、西方丘陵上に位置する古墳に用いられているもの、あるいは東北域に位置する。奈良前期の細井庵寺でみられる壺にそれぞれ近似しており、今後の検討によって両者のいずれと関わりのある遺物であるかが明らかとなろう。一方、青磁については、中国からの輸入品であり、当該遺跡でこれが出土したということは、この遺跡を構成した氏族の性格の一端をしのばせるものとなろう。

この他、上師器、瓦器片が比較的豊富に出土しているが、これらについても、今後、当該遺跡、および時代の研究にあって、一括資料としての価値を充分に発揮するものと考えられる。

## 付 錦型遺跡出土土器の胎土分析

奈良教育大 三辻利一

錦型遺跡、嶽山遺跡、竜泉寺跡から出土した土器、瓦片などを蛍光X線分析法によって分析した。

試料は100～200メッシュ程度に粉碎し、15トンの圧力を加えてコイン状のペ

試料番号	出土遺跡	出土位置	器種	Su	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	錦型遺跡	南端	陶質土器	1.1	0.65	0.23	2.0	0.56	0.59
2	"	A地区	瓦質上器	1.3	0.29	0.08	1.9	0.36	0.22
3	"	SE040	土師、皿	0.96	0.52	0.13	2.2	0.44	0.29
4	"	SX040	土釜	0.91	0.45	0.40	2.9	0.29	0.50
5	"	SX045	土師、皿	0.87	0.60	0.38	3.4	0.41	0.60
6	"	SX040	"	0.80	0.57	0.33	3.6	0.39	0.45
7	"	中央ピット	土釜	0.89	0.40	0.48	2.7	0.23	0.81
8	竜泉寺	伽藍跡	瓦	1.0	0.45	0.15	2.3	0.23	0.11
9	嶽山遺跡	IFピット45	土師器	1.4	0.27	0.08	1.9	0.43	0.20
10	"	"	瓦	1.3	0.39	0.30	1.1	0.49	0.34

表2 錦型遺跡出土土器の分析結果

(分析値は標準試料JG-1による規格化値であることを示す)

レットにつくり、X線を照射した。

分析結果を表2に示す。表2に基づいて描いたRb-Sr分布図を図7に示す。No.1を除く他の試料はRbが少なく、須恵器にみられる東日本型であることを示した。しかし、これらの土師器や瓦が東日本産であることは考え難い。何故、このようなことが起るのか。1つの理由として、瓦質土器、土師器、瓦、土釜などは恐らく須恵器のような粘土を使用しないためと考えられる。したがって、窯跡出土須恵器の分析データはNo.1の陶質土器を除いて適用しない方がよいと考えた。そうなると、基礎データは全くないだけに、これらの上器、瓦などの産地を推定することはできない。そこで、分析データより、どの土器の胎土が類似しているかという観点から結果をまとめることにした。個々の試料の分析データを見てみよう。

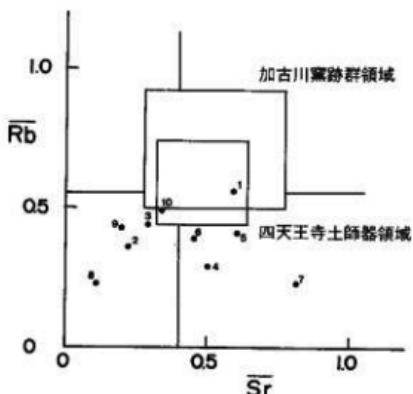


図7 錦聖遺跡、巖山遺跡、龍泉寺出土土器  
瓦の  $Rb/Sr - Sr/Sr$  分布図

No. 1 の陶質土器に窯跡出土須恵器の分析データを適用すると、 $Rb - Sr$  分布図より、近畿地方では兵庫県加古川周辺の窯跡出土須恵器に対応し、他の地域のものには対応しない。果して加古川窯跡群のものであるかどうかは錦聖遺跡と加古川窯跡の年代が一致するかどうかを調べなければ結論できない。 $Rb - Sr$  分布図では加古川周辺の須恵器に類似しているとだけはいえよう。

No. 2 の瓦質土器の胎土は巖山遺跡の上師器 (No. 9) の胎土と類似する。

No. 3, 5, 6 の上師器はいずれも四天王寺出土土師器の胎土とは異なる。このうち、No. 5, 6 の胎土は類似し、同じ産地のものと推定される。No. 3 の胎土は少し異なる。別産地のものと考えられる。

No. 4, 7 の土釜の胎土も類似するが、Sr 因子のみは少し異なるので、同一産地のものかどうかは不明である。

No. 8 の竜泉寺の瓦と、No. 10 の巖山遺跡の瓦の胎土は異なる。

## あとがき

石川西岸域には、縄文時代の錦織遺跡、錦織南遺跡をはじめ、歴史時代にいたる数多くの遺跡が位置している。

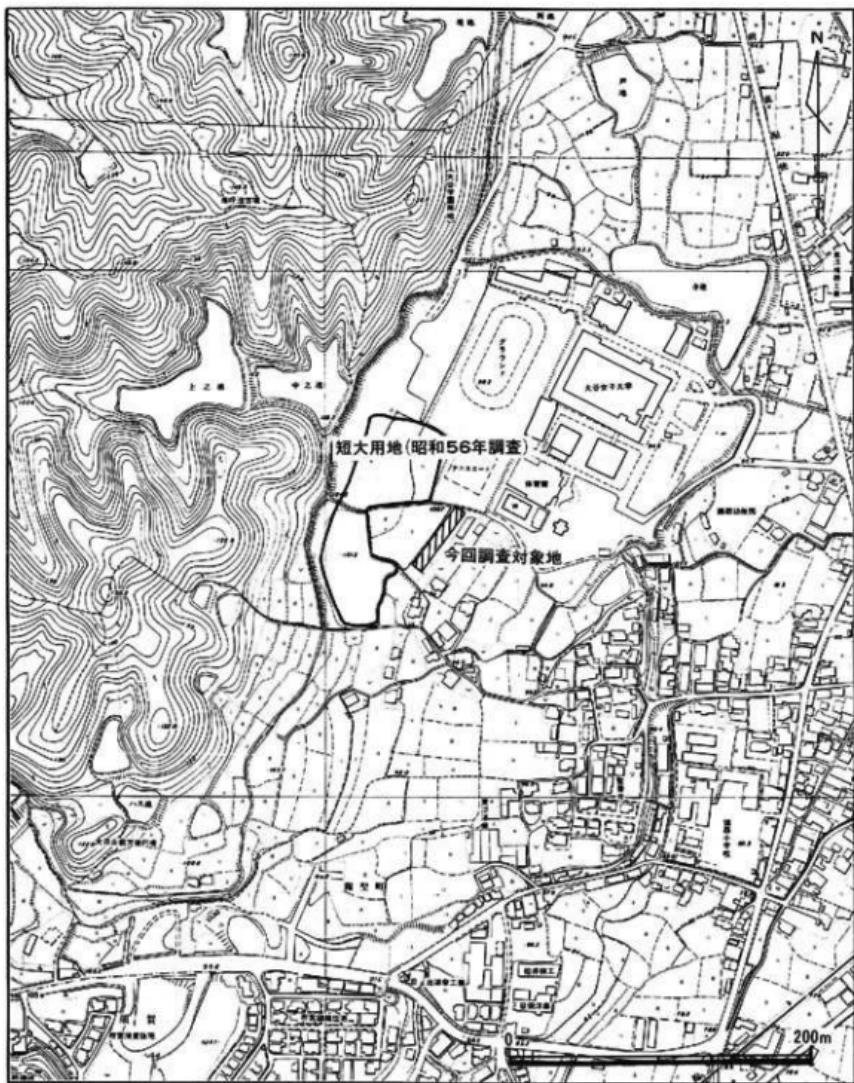
それらの一つたる錦型遺跡は、分布図に示された範囲が広く、時代も先史～歴史時代にわたる複合遺跡として注目されてきた。しかし、過去に実施された府、市の調査にあっては、わずかに遺物、遺構が検出されたことはあったが、その性格を忍ばせるものの確認はなかった。今回、中世期のものではあったが、その一端を検出したことで、今後の調査の展開に少なからず期待をよせることが出来るだろう。

厳寒期にあって外業調査に精励された調査員、補助員諸兄姉、さらに遺物整理にあたった諸姉の労を多とするとともに、本書のいささかでも今後の調査研究に裨益するところがあれば幸いである。

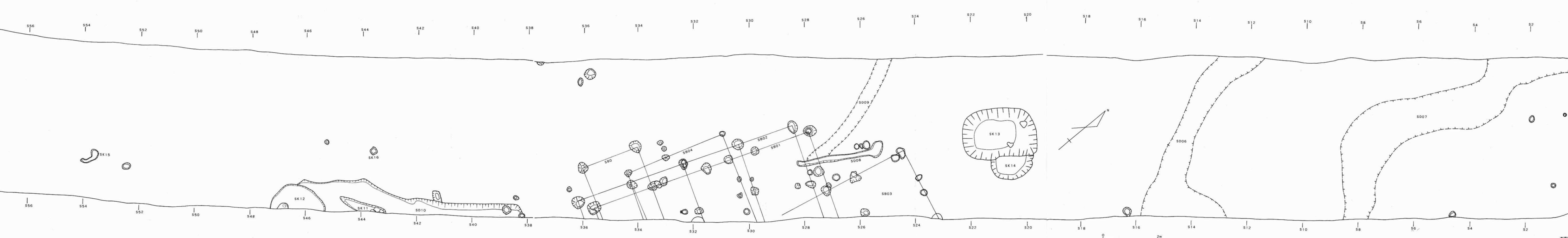
図 版



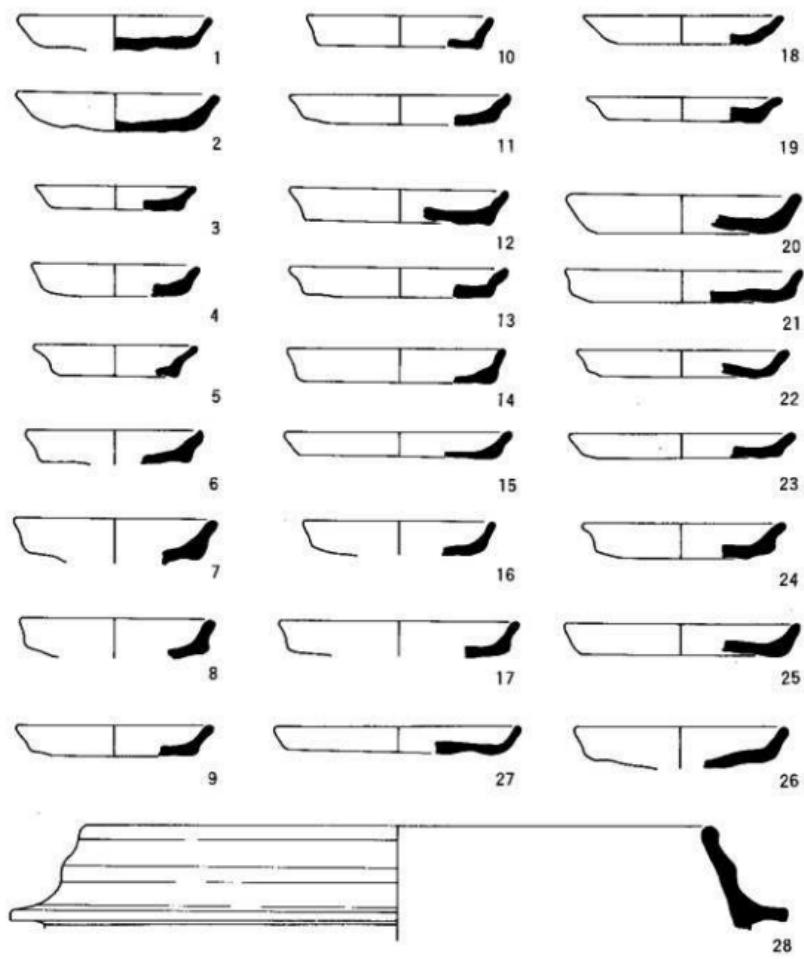
調査地と周辺遺跡



調査対象地

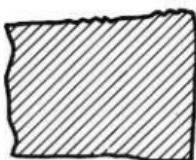


1



1.2 SK13土塙出土遺物  
3~26 SK15土塙出土遺物  
27 SB01遺物跡出土遺物  
28 表探遺物





1



2



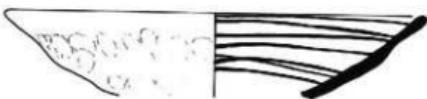
3



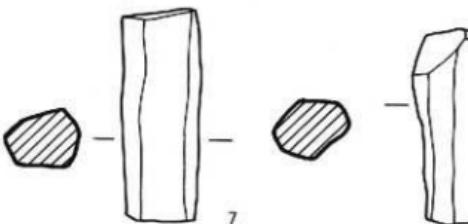
4



5



6



7



8



9

1.3~5 SK13土塗出土

2. SD10溝出土

6 SX16遺溝出土

7 SK17土塗出土





遺構全景（北から臨む）



遺構全景（南から臨む）



表土除去前



表土除去後



遺構検出状況



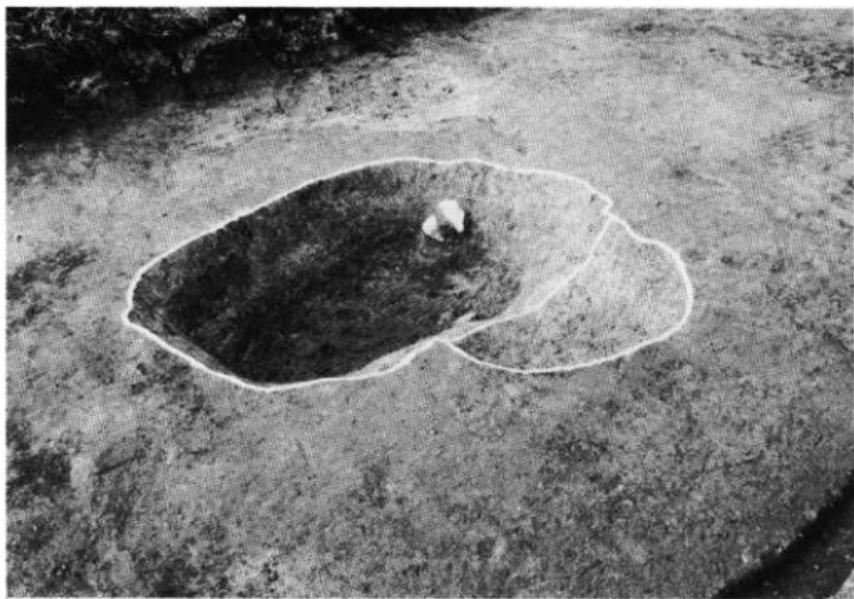
同 上



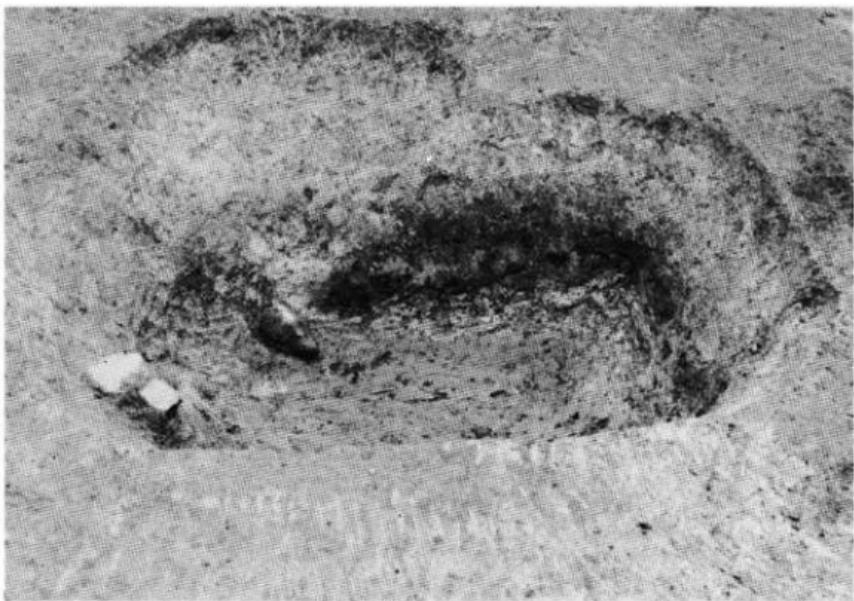
遺構検出状況



同 上



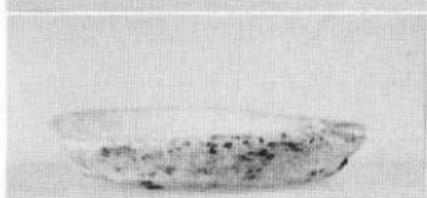
遺構検出状況



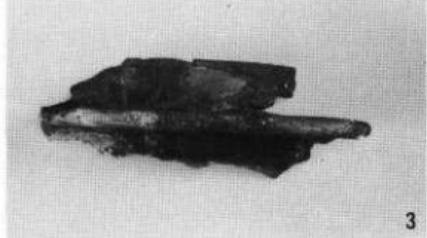
同上



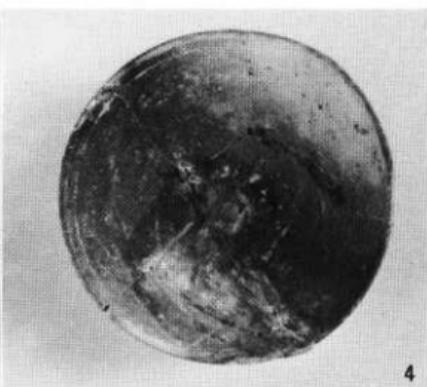
1



2



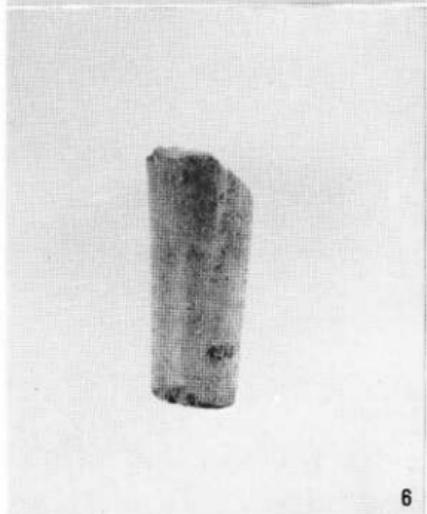
3



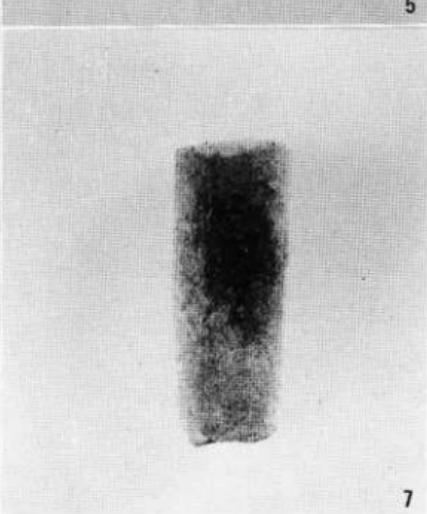
4



5

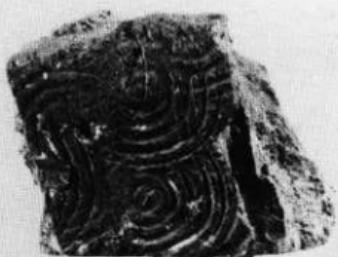


6



7

土師器（1, 2）土釜（3）瓦器（4, 5）瓦質土器（6, 7）



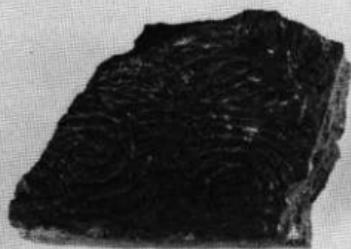
1



4



2



3



5

埠 (1~3) 磁器 (4, 5)

錦聖遺跡発掘調査報告書

富田林市埋蔵文化財調査報告 9

発行年月日 1983年3月

編集 錦聖遺跡発掘調査会

発行 富田林市教育委員会

印刷 白井印刷株式会社

